

## あいさつ

季 羨林

大江平和 訳

議長、ご来賓の皆さま、学者の皆さま、まず、私は、このたびのシンポジウムが大成功のうちに開催できたことを、心よりお祝い申し上げます。

きょうのこのシンポジウムは、大変重要だと思っています。なぜならば、今年は、新世紀、二十一世紀の第一年、すなわち新たな千年紀の第一年にあたるからです。中国のことわざに、「一年の始まりは春にあり、一日の始まりは朝にあり」とあります。二十一世紀の初頭にあたりまして、私たち全世界のリーダー、全世界の人民は、この世紀、この千年をどのように過ごすのか、

ということを考えなければならぬと思います。

私たちは問題を考える場合に、現実から切り離して考えるわけにはいきません。では、現実の状況はどのようなものか、と申しますと、新聞などで報じられているように、私たち人間と自然との関係が数多くの矛盾に満ちたものになっております。地球の温暖化、淡水の欠乏、生態系バランスの破壊、新疾病の発生、オゾン層の空洞化などなど、五十や六十もの問題が挙げられると思います。これらの問題が、今、私たちの目の前に向けられているのです。

これらの現象がどのようなにもたらされたのか、と申しますと、産業革命以降の科学技術の発展と関係があります。私は、科学技術の発展を全面的に支持しております。それがなかったならば、今日の電灯や電話、高層ビルなどの恩恵を受けることはできなかったでしょう。それらは科学技術によってもたらされたわけですから、私はその発展に賛成です。大いに賛成です。

しかし、この地球上、プラス面の裏には、マイナス面が必然的に備わっております。科学技術の発展というのは、良いことでありますけれども、それに伴うマイナスの悪い面もあります。

この問題について、人々は、最近になってはじめて気づいたわけではありません。「正しく人間と自然との関係を処理する」という問題は、ずいぶん昔から提起されてきました。ドイツの大詩人ゲーテは、「大自然は永遠に誤りをおかすことはない。誤りをおかすのは人間なのである」と言っていますし、エンゲルスも「私たち人間は、大自然に対する勝利に陶醉しすぎてはな

らない。なぜなら、毎回の勝利に対して、大自然は必ず私たちに報復してくるからである」と言っています。このような言葉は、現在ではなく、百年前、二百年前に、すでに言われていたことであります。私はこの期に及んで、この思想家たちが言った言葉は全く正しかったと認めざるを得ません。

西洋で主流になっている思想は、「人間にとって自然との関係は、対立するものである」というものです。ちなみに、中英辞典をひもといて、「conquer」(征服)という単語を調べてみてください。その下には「to conquer the nature」(自然を征服する)という例が挙げられています。これは西洋の中心的思想です。

それでは、東洋の思想はどうか、と申しますと、今進めております池田先生との談話の中で、私は「天人合一」という言葉を使っております。

ここには、多くの哲学者、専門家、学者、教授の方々がいらっしやいますけれども、この「天人合一」というものには、中国哲学史上、実に数多くの様々な解釈があります。私の解釈は、どちらかというと、宋

代の張載という人がたてた解釈に基づいております。張載の著作の中で『西銘』という著作がありますけれども、その中に、「民、吾同胞。物、吾与也」という言葉があります。この意味は、つまり、人民は、どこの国の人民であれ——当時、張載の時代は、私のこのような言い方はありませんでしたので、これは、当然、現代語訳になりますが、——皆、私の同胞であり、兄弟であるということです。そして、物は、動物であれ、植物であれ、皆、私の仲間である、という意味です。

ですから、先ほど述べたように、私たち人類の目の前には、人間と大自然との間のさまざまな矛盾した関係があります。この矛盾した関係を解決しなければ、人類の前途は影響を及ぼされてしまうでしょう。ですから、科学技術は、引き続き、進歩させ、発展させていかなければならない。それと同時に、科学技術がもたらすマイナス部分を、私たちは何らかの方法を講じて、取り除いていかなければなりません。

そのマイナス部分を取り除く思想的な基盤とは何か。それは、私が思うには、東洋文化、なかんずく「天人

合一」思想であります。それは西洋の思想ではありません。古代インド哲学の中で、ある有名な言葉があります。それはサンスクリットで、“tat tvam asi”ということです。“tat”は英語で“that”、“tvam”は「あなた」、「asi」は「〜です」にそれぞれ相当します。ですから、「あなたは、つまりそれである」という意味です。この“tat”は宇宙を指し、「あなたは」は「人類」を指します。つまり、人類はすなわち宇宙であり、宇宙はすなわち人類であるということになります。

皆さんもご存知のように、仏教史から見ると、仏教は、バラモン教に反対する立場をとります。バラモン教に反対するといっても、すべてを否定するわけではありません。「天人合一」について言うと、私が思うに、バラモン教もまた「天人合一」と相通するものがあります。

仏教をさらに細かく分けますと、大乘仏教、小乗仏教という違いがあります。ここには多くの仏教の専門家がいらつしやいますので、この道理を説明しないでおくと、義理を欠くことになってしまいますので、一

般的な理解についてだけお話ししたいと思います。その違いは何かと言いますと、小乗仏教は個人の修行を強調します。つまり、功德は回向できない。例えば、私が修行して、それによって得られた功德というのは、両親にまわしていくことはできません。大乘仏教と小

乗仏教の一番大きな違いというのは、衆生を普く救い、功德を回向していけることだと思います。菩薩は衆生を普く救うことができます。これは、私が思うに、『法華経』の「観世音普門品」の中に説かれている中心的な思想です。観音菩薩というのは、中国におきましては、大慈大悲の象徴であり、普く衆生を救う象徴でもあります。「普門品」の中にはたくさん例が挙げられております。どのような人であっても、災難や困難に見舞われたなら、観世音に救いを求めなさい。そうすれば、必ず解決しますよ、と。

先ほど、杜継文先生がこれから発表される「平和、生態系と大乘の精神」というタイトルを拝見しました。最後まで目を通したわけではありませんが、私が述べたところと似ている、あるいは共通するところがある

ように思います。

要するに、話をまとめますと、今日、私たちは、一方では、科学技術をさらに発展させなければならぬ。これについては、何ら問題はないと思います。他方で、私たちは、東洋文化で西洋文化の誤りを補っていかなければならない。西洋文化が直面する困難な局面を、私たちは、東洋文化、東洋の思想で応援し、援助の手を差し伸べなければならないと思います。

昨日、読んだ新聞に、ある本のが紹介されていきました。それは、ノーベル賞を受賞したベルギーの学者が書いた本だったのですが、老孟思想の中で、中国の最高レベルを代表するのは、莊子である、とその学者は述べていました。春秋戦国時代、ご存知の通り、「子」（学問のある人）がたくさん現れ、老子、莊子、孔子、孟子、荀子などの様々な思想家が出現しました。学説はそれぞれ異なっておりますが、私が見るところ、「天人合一」思想という一点については、莊子であれ、孔子であれ、いずれもさほど違いはありません。先ほども申し上げましたように、「天人合一」思想は、大乘

仏教と通底しております。

ともあれ、二十一世紀の第一年を迎え、新たな千年紀の第一年にあたりまして、私たち全世界の人民が必要としているのは平和であり、理解であり、友情であると感じています。誘導弾ミサイル防衛システムなどというものを必要としているわけではありませんし、戦闘機を飛ばして他の国を攻撃する必要はありません。また、国際警察などというものを必要としているわけではありません。私たちが必要としているのは平和であり、理解であり、友情であります。それらを実現するためにも、いやまして、大乘仏教の思想を含む東洋思想を宣揚していただきたいと希望しております。

先ほども申しました通り、きょう、このシンポジウムが開かれた「時」というのは、きわめて時宜を得たもので、非常に重要で、かつ意義が深いと思います。私は哲學家でもありませんし、思想家でもありません。きょうの私の思いつくままの発言について、どうぞ皆さま、忌憚のない意見をお願いしたいと思います。あ

りがとうございました。

(きせんりん／北京大学教授)  
(訳・おおえへいわ／通訳)